

# 千古の時を越えるかわら

中国<sup>しん</sup>秦<sup>かん</sup>・漢の時代（約二千年前ころ）から、

瓦は宮<sup>きゅうでん</sup>殿<sup>やくしよ</sup>や役所、貴族<sup>きぞく</sup>の住まいを飾り<sup>かざ</sup>防水<sup>ぼうすい</sup>と  
防火<sup>ぼうか</sup>に優<sup>すぐ</sup>れた実用品<sup>じつようひん</sup>として盛<sup>さか</sup>んにつかわれた。

日本では飛鳥寺<sup>あすかでら</sup>（596年に完成）や四天王寺<sup>してんのうじ</sup>  
の創建<sup>そうけん</sup>に初めて瓦が使われた。当時から屋根<sup>やね</sup>の  
部所<sup>ぶしよ</sup>に合<sup>あ</sup>った各種の瓦が作り分けられ、現在で

もその<sup>きほんてき</sup>基本的な<sup>きのう</sup>機能も使用方法も変わっていない。しかも、千四百年も前に作られた瓦が今<sup>がらん</sup>なお伽藍の屋根に<sup>ふ</sup>葺かれている事実がある。

また、当時瓦の<sup>いしょう</sup>基本的な意匠<sup>からくさ</sup>となった「唐草」や「<sup>れんげ</sup>蓮華」は<sup>はる</sup>遥かローマやインドから伝わったものです。このミニ展示では、「かわら」とその時代に<sup>ふ</sup>触れる<sup>いひん</sup>遺品として市域の<sup>しゅつどひん</sup>出土品や<sup>きぞうひん</sup>寄贈品の中から紹介します。